江戸時代の変体仮名の字母字形の変遷と傾向

――中でも『好色一代男』の特異性について――

坂　康尊

はじめに

本論文の目的は、江戸時代に用いられた変体仮名の主要な字母の変遷を知ることと、字形の使用傾向を知ることである。このような内容を選んだ理由は、私が元々「字」というものに関心が高かったからである。

大学に入学し変体仮名を学び、字母というものが数多く存在することを知った。また、同一の字母の中でもさらに形が異なるものが存在することを知り、これらについて調べてみることにした。

調査対象に江戸時代を選んだ理由は、平安時代をはじめとした、文学が貴族や一部の階級の人々のみの娯楽、学問であった時代と異なり、庶民の娯楽としての文学、つまりは変体仮名が大衆化した時代だったからということと、長く続いた時代であったために、変遷を見るに適した時代だと考えたからである。

今回、多くの庶民に読まれたであろう七つの文学作品を調査した。先行論文[1]から、時代を経るに連れて、字母及び字形は統一が進み、数が減少していくことが予想されたが、これらの作品それぞれの字母や字形の種類、数や使用傾向を比較していくことで、参考とした論文だけではわからなかったところの、具体的にどのような字母が主要な字母で有り続けたのか、ということ、また字形に関しては、使用傾向に規則性があるかどうか、ということに関して調査してみた。

第一章　調査方法・前提

まずそれぞれの作品の字母、字形数を調べてみた。できる限り作品全体から抜粋し、調査文字数は一万字程度とした。調査作品、調査範囲及び調査結果はそれぞれ後述する。

字母を比較する際に考慮しなければならないことは、極端に使用率の低い字母の扱いである。これは後述のそれぞれの作品の調査結果を見るとわかるが、一万字以上調査した中で、一字や二字でしか用いられていない字母が存在する。しかも、今回調査した部分は作品の一部であるため、調査範囲外に同様の字母が存在する可能性はあると思われる。このことから正確な字母数を把握することは困難であるため、比較する際にはこのような字母は除外することとした。除外する基準として、それぞれの字母を一つの平仮名の中でどの程度用いられているかをパーセント（以後％）で表し、10％未満の字母については除外することとした。

次に字形の調査方法に関してだが、これは字母とは異なり明確な判断基準がないため非常に難しい。よって、客観的に判断できるよう、調査結果に底本から抜き出した画像をそれぞれ添付すると共に、非常に曖昧なものではあるが、次のような基準を設けて区別していく。

i、「行書体」に近いものか「草書体」に近いものかどうか。

ii、同じ書体の中で、崩し方に明らかな差異が認められるかどうか。

iiに関しては、細部が異なる字形であっても、崩し方そのものに大差はないと判断したものに関しては同一の字形として扱う。

例：てとてやるとるは、原則同一扱い。

別計算はゆやく等。但し、作品によっては字形の細部が異なるため、一部混合している場合もある。

調査対象に関しては、本論文の調査対象はあくまで変体仮名（平仮名）であるため、漢字、片仮名、踊り字、合字は調査対象外とした。振り仮名に関しては、変体仮名が用いられているものの、江戸時代を通して本文と比較して明らかに字母及び字形の統一が進んでおり、本文とは傾向が大きく異なるため、同じく調査対象外とした。

二章では調査結果と共に、用いた底本の情報や調査範囲、それぞれの調査に用いた参考文献を記載する。また調査結果に関しては、できる限り正確な調査を行ったつもりではあるが、手作業であるため、一部誤りもあると思われる。しかし、使用比率に変動をきたすほどの誤りはないと思われるので、主要な字母の調査及び字形の使用傾向の規則性の調査といった、主目的の達成には影響は少ないと考える。

調査結果を基にした比較、考察、特徴等は三章以降において述べる。

また、前述の通り作品のすべてを調査したわけでもなく、調査作品数も七作品に留まるため、今回の調査のみで確実な結論を出すことは困難ではあるが、大まかな傾向を知るということに重点を置いた調査あることを始めに断っておく。

以上のことを前提として、調査を進めていく。

第二章　調査作品の詳細・調査範囲・調査結果

本章では、今回調査に用いた七つの文学作品、底本の情報及び調査範囲、調査結果を、刊行年が古いものから順に記載する。

それぞれの調査範囲に、具体的な頁（丁）を記載していない部分に関しては、記載されている話全体を調査したものであり、記載してあるものは話の一部を調査したものである。

一、『醒睡笑』

著者：安楽庵策伝

成立：寛永五年（一六二八）頃

調査に用いた底本は、酔生書庵蔵本の影印本（鈴木棠三編『寛永版醒睡笑　上　中　下』笠間書院　上中下全て昭和五八年二月二十日初版第一刷発行）である。具体的な刊記は、記述がはっきりとした底本が手に入らなかったため不明ではあるが、用いられた版木は寛永版となっており、少なくとも寛永年間に作成されたものであるとの見方が強い底本を調査した。上巻によると、今回用いた寛永版の他に、慶安元年版、慶安二年版、万治元年版、無刊記本等が現存しているようである。

調査範囲に関しては次の通り。読解にあたっては、古谷知新編『滑稽文學全集第九巻』（文藝書院　大正七年二月十五日発行）を参考とした。

一巻　「名付親方」「賢だて」

二巻　「謂被謂物之由来」「祝過るもいな物」

三巻　「文字知顔」「清僧」

四巻　「以屋那批判」「唯有」

五巻　「姥心」「人はそたち」

六巻　「若道不知」「うそつき」

七巻　「思の色を外にいふ」「舞」

八巻　「平家」「祝済多」

調査結果は次の通り。

『醒睡笑』
調査文字数
10,359
総字母数
101個
内除外字母
31個
差引字母数
70個

坂　康　尊

			さ
		佐	左
		13	158
		8%	92%
			し
		志	之
		59	354
		14%	86%
			す
須	寸	春	
23	30	119	
14%	17%	69%	
			せ
		勢	世
		2	97
		2%	98%
			そ
			曾
			137
			100%

				か
		閑	加	可
		6	25	455
		1%	5%	94%
				き
			起	幾
			2	205
			1%	99%
				く
			具	久
			1	182
			1%	99%
				け
氣	希	介	計	遣
1	6	11	22	135
1%	3%	6%	13%	77%
				こ
			古	己
			8	136
			6%	94%

		あ
阿	安	
66	249	
21%	79%	
		い
		以
		309
		100%
		う
		宇
		126
		100%
		え
		衣
		23
		100%
		お
		於
		99
		100%

			は
波	盤	者	八
24	129	165	205
5%	25%	32%	39%
			ひ
		飛	比
		28	167
		14%	86%
			ふ
		婦	不
		18	232
		7%	93%
			へ
		遍	部
		16	143
		10%	90%
			ほ
		本	保
		14	54
		21%	79%

			な
		那	奈
		13	310
		4%	96%
			に
丹	仁	耳	尓
4	14	101	434
1%	3%	18%	78%
			ぬ
		怒	奴
		13	31
		30%	70%
			ね
		孫	年
		11	34
		24%	76%
			の
	農	能	乃
	8	76	446
	2%	14%	84%

		た
太	堂	多
1	11	363
0%	3%	97%
		ち
		知
		78
		100%
		つ
津	徒	川
2	32	150
1%	17%	82%
		て
		天
		363
		100%
		と
	登	止
	12	683
	2%	98%

		わ
和	王	
10	49	
17%	83%	
		ゐ
		爲
		20
		100%
		ゑ
		惠
		4
		100%
		を
越	遠	
10	396	
2%	98%
		ん
		无
		123
		100%

			ら
		羅	良
		13	190
		6%	94%
			り
	李	里	利
	1	18	369
	0%	5%	95%
			る
	類	累	流
	3	7	14
	1%	2%	4%
			れ
		禮	連
		78	208
		27%	73%
			ろ
		路	呂
		3	40
		7%	93%

		や
屋	也	
36	134	
21%	79%
		ゆ
由	遊	
10	22
31%	69%
		よ
	与	
	180
	100%

		ま
満	万	末
13	36	113
8%	22%	70%
		み
見	美	三
6	34	44
7%	40%	52%
		む
		武
		45
		100%
		め
	帝	女
	1	61
	2%	98%
		も
	寒	毛
	1	271
	0%	100%

『醒睡笑』

総字形数

124個

		佐	左
		13	158
		志	之
		59	354
須	寸2	寸1	春
23	6	24	119
	勢	世2	世1
	2	24	73
		曽2	曽1
		45	92

		開	加
		6	25
		起	幾2
		2	1
			具
			1
氣	希	介	計
1	6	11	22
			古
			8

安	阿
66	249
以2	以1
1	308
	宇
	126
	衣1
	23
於2	於1
47	52

波	盤2	盤1	者	八
24	19	110	165	205
			飛	比
			28	167
			婦	不
			18	232
			遍	阝
			16	143
		本	保2	保1
		14	4	54

		那	奈2	奈1
		13	132	178
丹	仁	耳	尓2	尓1
4	14	101	52	381
			怒	奴
			13	31
			祢	年
			11	34
	愚	能	乃2	乃1
	8	76	185	261

太	堂	多2	多1
1	11	19	344
			知
			78
津	徒	川2	川1
2	32	18	132
		天2	天1
		64	299
		登	止
		12	683

	和	王
	10	49
		盒
		20
		恵
		4
越	遠2	遠1
10	18	378
		无
		123

		羅	良2	良1
		13	8	182
		李	里	利
		1	18	369
類	累	流	留2	留1
3	7	14	37	315
		禮2	禮1	連
		1	77	208
			路	呂
			3	40

屋	也2	也1
36	1	133
由2	由1	遊
1	9	22
		与
		180

満2	満1	万	末
6	7	36	113
	見	三	美
		21	59
			武
			31
		免	女
		11	82
寛	毛3	毛2	毛1
174	35	54	182

二、『好色一代男』

著者：井原西鶴

成立：天和二年（一六八二）

底本は、早稲田大学中央図書館蔵本の影印本、浅野晃編『好色一代男　影印』（おうふう　平成八年一月二五日初版発行）である。刊記に関しては、底本末に、

天和二壬戌手陽月中旬
大坂思案橋荒砥屋
孫兵衛可心版

とある。

調査範囲に関しては次の通りで、それぞれの巻の最初と最後の話にあたる部分である。読解にあたっては、浅野晃編『好色一代男　翻刻』（おうふう　平成八年一月二五日初版発行）を参考とした。

一巻　「けした所が戀のはじまり」「別れは當座ばらひ」

二巻　「はにふに寢道具」「うら屋も住所」

三巻　「恋のすて銀」「口舌の事ふれ」

四巻　「因果の関守」「火神鳴の雲がくれ」

五巻　「後は様つけて呼」「今爰へ尻が出物」
六巻　「喰さして袖の橘」「全盛歌書羽織」
七巻　「其面影は雪むかし」「新町の夕暮嶋原の曙」
八巻　「らく寝の車」「床の責道具」

調査結果は次頁の通り。

『好色一代男』調査文字数

11,572

総字母数

101個

内除外字母

28個

差引字母数

73個

坂康尊

			さ
			左
			234
			100%
			し
		志	之
		93	685
		12%	88%
			す
壽	寸	須	春
16	64	74	86
7%	27%	31%	36%
			せ
		勢	世
		16	125
		11%	89%
			そ
		楚	曾
		53	102
		34%	66%

			か
		閑	加	可
		1	215	367
		1%	37%	63%
				き
			起	幾
			10	365
			1%	97%
				く
			具	久
			1	182
			1%	99%
				け
氣	介	計	遣	希
2	3	13	53	80
1%	2%	9%	38%	58%
				こ
			古	己
			48	140
			26%	74%

	あ
安	阿
62	161
28%	72%
	い
	以
	205
	100%
	う
	宇
	123
	100%
	え
	衣
	38
	100%
	お
	於
	137
	100%

			は
波	盤	者	八
2	21	170	440
0%	3%	27%	70%
			ひ
		飛	比
		17	132
		11%	89%
			ふ
	布	婦	不
	1	11	163
	1%	6%	93%
			へ
		遍	β
		51	106
		32%	68%
			ほ
		保	本
		17	22
		44%	56%

			な
		那	奈
		38	317
		11%	89%
			に
仁	耳	尓	丹
1	9	16	664
0%	1%	2%	96%
			ぬ
		怒	奴
		1	100
		1%	99%
			ね
			祢
			21
			100%
			の
	農	能	乃
	5	55	758
	1%	7%	93%

		た
太	堂	多
2	30	225
1%	12%	88%
		ち
		知
		60
		100%
		つ
津	徒	川
2	91	160
1%	36%	63%
		て
	帝	天
	2	618
	0%	100%
		と
	登	止
	1	511
	0%	100%

	わ
	王
	30
	100%
	ゐ
井	爲
1	4
20%	80%
	ゑ
	を
越	遠
169	224
43%	57%
	ん
	无
	46
	100%

			ら
		羅	良
		16	285
		5%	95%
			り
李	里	契	利
1	24	32	299
0%	7%	9%	84%
			る
累	流	留	類
6	23	136	183
2%	7%	39%	53%
			れ
		禮	連
		33	241
		12%	88%
			ろ
		路	呂
		32	50
		39%	61%

		や
		也
		128
		100%
		ゆ
		由
		27
		100%
		よ
		与
		157
		100%

		ま
万	満	末
6	39	166
3%	18%	79%
		み
	三	美
	21	59
	26%	74%
		む
	無	武
	6	31
	16%	84%
		め
	免	女
	11	82
	12%	88%
		も
	堂	毛
	174	236
	42%	58%

『好色一代男』

総字形数
122個

安	阿
62	161

以2	以1
71	134

宇
123

衣2	衣1
1	37

於2	於1
52	85

閑	加	可
1	215	367

起	幾2	幾1
10	15	250

久
226

氣	介	計	遣	希
2	3	13	53	80

古	己
48	140

左
234

志	之
93	685

壽	寸2	寸1	須	春
13	22	42	74	86

塾	世
16	125

楚	曾
53	102

波	盤2	盤1	者	八
2	8	13	170	440

飛	比
17	132

布	婦	不
1	11	163

遍	阝
51	106

保2	保1	本
7	10	22

那	奈2	奈1
38	148	169

仁	耳	尓2	尓1	丹
1	9	3	13	664

怒	奴
1	100

祢2	祢1
9	12

豊	能	乃2	乃1
5	55	95	663

太	堂	多1
2	30	225

知
60

津	徒	川2	川1
2	91	64	96

帝	天2	天1
2	229	389

登	止
1	511

王
30

井	爲
1	4

越	遠2	遠1
169	24	200

无
46

羅	良2	良1
16	27	258

李	里	梨	利2	利1
1	24	32	6	293

累	流	留2	留1	類
6	23	18	118	183

禮2	禮1	連
3	30	241

路	呂
32	50

也
128

由2	由1
1	26

与2	与1
5	152

万	満	末
6	39	166

三	美
21	59

無	武
6	31

免	女
11	82

裳	毛3	毛2	毛1
174	34	81	122

三、『浮世親仁形気』

作者：江嶋其磧

成立：享保五年（一七二〇）

底本は、東京大学総合図書館霞亭文庫蔵本の画像（電子版霞亭文庫　番号二六三　http://kateibunko.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/katei/index_srch.html?）である。これにも正確な刊記が記されていないが、参考とした文献（八文字屋本研究会　代表　長谷川強『八文字屋本全集　第七巻』汲古書院　一九九四年十一月発行）六〇三頁一三行目の、

五之巻末の広告と刊記をすべて削った本。従って五之巻の実丁数が半丁減ることになるが、他はすべて初印本に同じ。

という記述から、初版と同様のものであると考える。

調査範囲に関しては次の通りで、読解にあたっては前述の⑧を参考とした。

一巻　「食を楽む達者親父」「相撲を楽む強力親父」

二巻　「金を楽む高利親父」「色を楽む血気の親父」

三巻　「踊りを楽む息子自慢の親父」

四巻　「薬を楽む寿命親父」

五巻　「独楽む偏屈親父」「経を楽む信心親父」

調査結果は次の通り。

『浮世親仁形気』
調査文字数
10,605
総字母数
81個
内除外字母
18個
差引字母数
63個

			あ
			安
			136
			100%
			い
			以
			334
			100%
			う
			宇
			95
			100%
			え
			衣
			3
			100%
			お
			於
			89
			100%

			か
		加	可
		129	440
		23%	77%
			き
		起	幾
		28	105
		21%	79%
			く
		具	久
		1	170
		1%	99%
			け
	遉	介	計
	7	16	115
	5%	12%	83%
			こ
		古	己
		1	103
		1%	99%

			さ
		佐	左
		7	230
		3%	97%
			し
		志	之
		82	393
		17%	83%
			す
	須	春	寸
	37	90	99
	16%	40%	44%
			せ
			世
			148
			100%
			そ
			曾
			94
			100%

			た
		堂	多
		1	319
		0%	100%
			ち
		地	知
		1	61
		2%	98%
			つ
	徒	津	川
	5	14	217
	2%	6%	92%
			て
		帝	天
		1	669
		0%	100%
			と
			止
			490
			100%

			な
		那	奈
		1	360
		0%	100%
			に
	耳	丹	仁
	9	12	319
	1%	2%	47%
			ぬ
			奴
			108
			100%
			ね
		祢	年
		21	24
		47%	53%
			の
		能	乃
		103	650
		14%	86%

			は
	波	者	八
	12	68	514
	2%	11%	87%
			ひ
			比
			140
			100%
			ふ
		婦	不
		2	176
		1%	99%
			へ
			阝
			196
			100%
			ほ
			本
			32
			100%

			ま
		末	満
		75	81
		48%	52%
			み
	見	美	三
	4	12	53
	6%	17%	77%
			む
			武
			62
			100%
			め
			女
			89
			100%
			も
			毛
			285
			100%

			や
			也
			162
			100%
			ゆ
			由
			29
			100%
			よ
			与
			89
			100%

			ら
			良
			312
			100%
			り
		里	利
		10	257
		4%	96%
			る
	類	流	留
	2	3	284
	1%	1%	98%
			れ
		連	禮
		70	275
		20%	80%
			ろ
			呂
			29
			100%

			わ
	和	王	
	5	35	
	12%	88%	
			ゐ
		爲	
		4	
		100%	
			ゑ
		恵	
		1	
		100%	
			を
	越	遠	
	104	393	
	21%	79%	
			ん
		无	
		57	
		100%	

『浮世親仁形気』

総字形数

101個

坂康尊

			佐	左		加	可		安		
			ぢ	さ		か	う		あ		
			7	230		129	440		136		
			志	之		起	幾		以		
			し	ノ		き	き		い		
			82	393		28	105		334		
須	春	寸2	寸1			具	久		宇		
す	す	寸	寸			ぐ	く		う		
37	90	8	91			1	170		95		
		世2	世1		遣	介	計		衣		
		せ	せ		け	け	け		え		
		1	147		7	16	115		3		
		曾2	曾1			古	己		於2	於1	
		そ	そ			こ	こ		お	お	
		1	93			1	103		3	86	

波	者	八				那	奈2	奈1	堂	太	多2	多1
は	ち	い				な	な	な	た	た	た	た
12	68	514				1	29	331	1	15	34	285
		比		耳	丹	尓2	尓1	仁			地	知
		ひ		み	み	ぬ	ぬ	に			ち	ち
		140		9	12	99	247	319			1	61
	婦	不						奴	徒	津	川2	川1
	ふ	ふ						ぬ	つ	つ	つ	つ
	2	176						108	5	14	19	198
		阝				祢2	祢1	年		帝	天2	天1
		へ				ね	ね	ね		て	て	て
		196				2	19	24		1	1	668
		本				能	乃2	乃1				止
		ほ				の	の	の				と
		32				103	25	625				490

	和	王			良2	良1	也2	也1	満2	満1	末
	わ	を			ら	ら	や	や	ま	ま	ま
	5	35			33	279	68	93	32	49	75
		爲			里	利	由2	由1	見	美	三
		ゐ			り	り	ゆ	ゆ	み	み	み
		27			10	217	1	28	4	12	53
		恵		類	流	留2	留1				武
		え		る	る	る	る				む
		1		2	3	27	257		与		62
越	遠2	遠1				連	禮				女
を	を	を				れ	れ				め
104	67	326				70	275				89
		无					呂		毛3	毛2	毛1
		ん					ろ		も	も	も
		57					29		9	82	194

四、『英草紙』

作者：近路行者（都賀庭鐘）

成立：寛延二年（一七四九）

底本は、国立国会図書館蔵本の画像（国立国会図書館デジタルコレクション　英草紙5巻　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2537603 書誌ID000007313962）で、刊記は底本末に、

寛延二年龍集己巳九月出来

江戸通本町三丁目

西村源六

書林　大阪心齋橋順慶町

柏原屋清右衛門

同　南久宝寺町

河内屋八兵衛

とある。

調査範囲は次の通りで、読解にあたっては中村幸彦校注・訳『新編日本古典文学全集78』（小学館　一九九五年十一月刊）を参考とした。

一巻「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」の一丁表から六丁裏まで
二巻「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」の一丁表から八丁表まで
三巻「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」
　一丁表から八丁裏まで
四巻「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」の一丁表から七丁裏まで
五巻「白水翁が賣卜直言奇を尓す話」の一丁表から七丁表まで

調査結果は次頁の通り。

『英草紙』
調査文字数
10,210
総字母数
90個
内除外字母
25個
差引字母数
65個

							か				あ
			さ				可			阿	安
			左			加	360			39	181
			123			26	93%			18%	82%
			し				き				い
		志	之			起	幾				以
		29	566			15	141				164
		5%	95%			10%	90%				100%
			す				く				う
		須	春			具	久				宇
		155	171			2	151				39
		46%	52%			1%	99%				100%
			せ				け				え
		勢	世		氣	遣	介	計			衣
		1	110		1	1	21	63			40
		1%	99%		1%	1%	24%	73%			100%
			そ				こ				お
			曾			古	己				於
			39			19	146				30
			100%			12%	88%				100%

			は				な				た
波	盤	者	八			那	奈		太	堂	多
24	67	107	268			13	312		7	10	200
5%	14%	23%	58%			4%	96%		3%	5%	92%
			ひ				に				ち
		飛	比	丹	仁	耳	尓				知
		2	100	4	4	267	565				16
		2%	98%	0%	0%	32%	67%				100%
			ふ				ぬ				つ
		婦	不			怒	奴		津	徒	川
		2	152			1	43		2	13	82
		1%	99%			2%	98%		2%	13%	85%
			へ				ね				て
		遍	阝			年	祢				天
		38	198			1	20				619
		16%	84%			5%	95%				100%
			ほ				の				と
		保	本			能	乃			登	止
		3	8			80	704			1	577
		27%	73%			10%	90%			0%	100%

	わ						ら				ま
和	王				羅		良		屋	満	末
2	29				1		247		2	11	64
6%	94%				0%		100%		2%	15%	85%
	ゐ						り		ゆ		み
	爲				里		利		由	美	三
	3				50		417		24	8	37
	100%				11%		89%		100%	18%	82%
	る						る		よ		む
	寳		類	累	流		留		与		武
	1		4	6	8		480		119		48
	100%		1%	1%	2%		96%		100%		100%
	を						れ				め
越	遠				連		禮			免	女
31	670				79		155			12	61
4%	96%				34%		66%			16%	84%
	ん						ろ				も
	无						呂				毛
	98						15				307
	100%						100%				100%

『英草紙』

総字形数
106個

坂康尊

	左			加	可	安	阿				
	123			26	360	39	181				
志	之			起	幾		以				
29	566			15	141		164				
須	春			具	久		宇				
155	171			2	151		39				
勢	世	氣	遣	介	計		衣1				
1	110	1	1	21	63		40				
	曾			古	己	於2	於1				
	39			19	146	8	22				

波	盤	者	八			那	幸2	幸1		太	堂	多
24	67	107	268			13	32	280		7	10	200
		飛	比	丹	仁	耳	尓2	尓1				知
		2	100	4	4	267	81	484				16
		婦	不				怒	奴	津	徒	川2	川1
		2	152				1	43	2	13	26	56
		遍	阝			年	弥2	弥1			天2	天1
		38	198			1	1	19			126	493
		保	本			能	乃2	乃1			登	止
		3	8			80	180	524			1	577

	和	王			羅	良2	良1	屋	也2	也1	満2	満1	末
	2	29			1	8	239	2	26	60	2	9	64
		爲				里	利		申2	申1		美	三
		3				50	417		9	15		8	37
		恵	類	累	流	留2	留1			与1			武
		1	4	6	8	218	262			119			48
越	遠2	遠1			連	禮2	禮1					免	女
31	1	669			79	46	109					12	61
		无					呂				毛3	毛2	毛1
		98					15				66	42	199

五、『雨月物語』

作者：上田秋成

成立：安永五年（一七七六）頃

底本は国立国会図書館蔵本の影印本（『雨月物語　勉誠社文庫5』勉誠出版　昭和五十一年三月三十日第一刷発行）で、刊記は底本末に「安永五歳丙申孟夏吉旦」とある。

調査範囲は次の通りで、読解にあたっては高田衛校注・訳『新編日本古典文学全集78』（小学館　一九九五年十一月刊）を参考とした。

一巻「白峯」

二巻「夢慶の鯉魚」

三巻「仏法僧」

四巻「蛇性の婬」

五巻「青頭巾」

調査結果は次の通り。

『雨月物語』
調直文字数
10,014
総字母数
89個
内除外字母
20個
差引字母数
69個

坂
康
尊

		さ
	佐	左
	11	136
	7%	93%
		し
	志	501
	45	
	8%	92%
		す
須	寸	春
43	45	72
27%	28%	45%
		せ
	勢	世
	1	131
	1%	99%
		そ
	楚	曾
	44	62
	42%	58%

			か
		加	可
		162	303
		35%	65%
			き
		起	毒
		102	124
		45%	55%
			く
			久
			197
			100%
			け
希	遣	介	計
1	8	40	56
1%	8%	38%	53%
			こ
		古	己
		66	97
		40%	60%

	あ
阿	安
7	168
4%	96%
	い
	以
	184
	100%
	う
	宇
	55
	100%
	え
	衣
	32
	100%
	お
	於
	56
	100%

			は
波	盤	八	者
2	2	170	256
0%	0%	40%	60%
			ひ
		飛	比
		13	153
		8%	92%
			ふ
		婦	不
		12	258
		4%	96%
			へ
		遍	阝
		1	164
		1%	99%
		本	保
		4	31
		11%	89%

		な
	那	奈
	26	334
	7%	93%
		に
耳	仁	尓
2	167	505
0%	25%	75%
		ぬ
		奴
		76
		100%
		ね
	年	祢
	7	19
	27%	73%
農	能	乃
1	249	461
0%	35%	65%

		た
堂	太	多
13	35	205
5%	14%	81%
		ち
		知
		43
		100%
		つ
津	徒	川
4	9	132
3%	6%	91%
		て
		天
		580
		100%
	登	と
	14	461
	3%	97%

		わ
王		和
11		26
30%		70%
		ゐ
		為
		14
		100%
		恵
		3
		100%
		を
越		遠
212		264
45%		55%
		ん
		尤
		84
		100%

		ら
		良
		235
		100%
		り
	里	利
	44	367
	11%	89%
類	流	留
1	32	395
0%	7%	92%
		れ
	連	禮
	74	110
	40%	60%
		ろ
	呂	路
	10	31
	24%	76%

や	
也	
87	
100%	
ゆ	
由	
30	
100%	
与	
122	
100%	

	ま
満	末
51	135
27%	73%
	み
美	三
16	61
21%	79%
	武
	48
	100%
	め
免	女
19	68
22%	78%
	も
	毛
	306
	100%

『雨月物語』

総字形数

109個

	佐	左
	11	136
	志	之
	45	201
寸	須	春
45	43	72
勢	世2	世1
1	24	107
	楚	曾
	44	62

	加	可
	162	303
起	幾2	幾1
102	1	123
		久
		197
希	遺	介
1	8	40
	古	己
	66	97

阿	安
7	168
以2	以1
3	181
	宇
	55
衣2	衣1
2	30
於2	於1
1	55

波	盤	八	者
2	2	170	256
		飛	比
		13	153
		婦	不
		12	258
		遍	ß
		1	164
	本	保2	保1
	4	2	29

	那	奈2	奈1
	26	37	297
耳	仁	尓2	尓1
2	167	22	483
			奴
			76
	年	祢2	祢1
	7	9	10
農	乃2	乃1	能
1	227	234	249

堂	太	多2	多1
13	35	4	201
			知
			43
津	徒	川2	川1
4	9	20	112
		天2	天1
		260	320
		登	止
		14	461

	和	王
	11	26
		爲
		14
		恵
		3
越	遠2	遠1
212	1	263
		无
		84

	良2	良1
	23	212
	利2	利1
	44	367
類	流	留
1	32	395
	禮1	連
	74	110
	路	呂
	10	31

也2	也1
17	70
由2	由1
5	25
	与
	122

満2	満1	末
1	50	135
	美	三
	16	61
		武
		48
	免	女
	19	68
毛3	毛2	毛1
11	65	230

六、『東海道中膝栗毛』

作者：十返舎一九

成立：享和二年～文化一一年（一八〇二～一八一四）頃

底本は、岐阜大学図書館蔵本の影印本中村正明編『膝栗毛文芸集成第一巻　南総紀行旅眼石道中膝栗毛「発端・初編～三遍」』『膝栗毛文芸集成　第二巻　道中膝栗毛「四編～六遍」』『膝栗毛文芸集成　第三巻　道中膝栗毛「七編～八遍」』（ゆまに書房　いずれも二〇一〇年六月十日初版発行）である。刊記に関しては、それぞれの巻の末に、

初編　維時享和二載孟吉旦

後編　享和癸亥春

三編　享和四甲子春発行

四編　文化二乙丑春発兌

五編　文化丙寅春

五編追　文化三丙寅夏五月発兌

六編　維時文化丁卯春正月

七編　文化辰春

八編　文化六巳巳紀春正月発起

発端　于時文化甲戌初春

とある。

調査範囲は次の通りで、底本には丁付けが記されていないが、本編の始まりを一丁表として扱う。読解にあたっては、麻生磯次校注『東海道中膝栗毛　日本古典文学大系62』（岩波書店　一九五八年五月六日一刷発行一九八一年九月一〇日第一九刷発行）を参考とした。

初編　：一丁表から六丁表
後編乾：一丁表から五丁表
後編伸：一丁表から一丁裏
三遍上：一丁表から四丁表
三遍下：一丁表から四丁表
四遍上：一丁表から四丁裏
四遍下：一丁表から二丁裏
五遍上：一丁表から三丁裏
五遍下：一丁表から二丁表
五遍追：一丁表から三丁裏
六遍上：一丁表から四丁表

六遍下：一丁表から三丁表
七遍上：一丁表から三丁裏
七遍下：一丁表から二丁表
八遍上：一丁表から三丁裏
八遍中：一丁表から三丁裏
八遍下：一丁表から三丁裏
発端　：一丁表から六丁表

調査結果は次頁の通り。

『東海道中膝栗毛』
調査文字数
12,258
総字母数
81個
内除外字母
22個
差引字母数
59個

			あ
			阿
			1
			1%
			い
			以
			427
			100%
			う
			宇
			192
			100%
			え
			衣
			4
			100%
			お
			於
			271
			100%

			か
		加	可
		54	665
		8%	92%
			き
		起	幾
		70	183
		28%	72%
			く
			久
			271
			100%
			け
希	介		計
2	33		119
1%	21%		77%
			こ
		古	己
		40	219
		15%	85%

			さ
			左
			285
			100%
			し
		志	之
		128	429
		23%	77%
			す
寸	須		春
1	7		187
1%	4%		96%
			せ
			世
			132
			100%
			そ
			曾
			132
			100%

			た
		太	多
		2	565
		0%	100%
			ち
			知
			140
			100%
			つ
		徒	川
		46	313
		13%	87%
			て
			天
			486
			100%
			と
			止
			523
			100%

			な
		那	奈
		9	379
		2%	98%
			に
丹	耳		尓
2	5		444
1%	1%		98%
			ぬ
			奴
			59
			100%
			ね
	年		祢
	8		61
	12%		88%
			の
			乃
			695
			100%

			は
波	盤	者	八
4	9	175	290
1%	2%	37%	61%
			ひ
		飛	比
		1	135
		1%	99%
			ふ
		婦	不
		5	279
		2%	98%
			へ
		遍	阝
		19	292
		6%	94%
			ほ
		保	本
		5	71
		7%	93%

			ま
		満	末
		52	181
		22%	78%
			み
		美	三
		9	65
		12%	88%
			む
		無	武
		2	43
		4%	96%
			め
		免	女
		4	86
		4%	96%
			も
			毛
			304
			100%

			や
		屋	也
		2	330
		1%	99%
			ゆ
			由
			40
			100%
			よ
			与
			156
			100%

			ら
			良
			303
			100%
			り
		里	利
		61	331
		16%	84%
			る
類	流		留
1	1		290
0%	0%		99%
			れ
	連		禮
	34		159
	18%		82%
			ろ
	路		呂
	3		83
	3%		97%

			わ
和	王		
1	72		
1%	99%		
			ゐ
	為		
	26		
	100%		
			ゑ
	恵		
	26		
	100%		
			を
	遠		
	294		
	100%		
			ん
	无		
	242		
	100%		

『東海道中膝栗毛』

総字形数

96個

		左
		285
	志	之
	128	429
寸	須	春
1	7	187
		世
		132
		曾
		132

	加	可
	54	665
	起	幾
	70	183
		久
		271
希	介	計
2	33	119
	古	己
	40	219

阿	安
1	183
以2	以1
88	339
	宇
	192
	衣
	4
於2	於1
7	264

波	盤	者	八
4	9	175	290
		飛	比
		1	135
		婦	不
		5	279
		遍	阝
		19	292
		保	本
		5	71

	那	奈2	奈1
	9	37	297
丹	耳	尓2	尓1
2	5	22	483
			奴
			59
	年	祢2	祢1
	8	9	10
		乃1	能
		234	249

	大	多
	2	565
		知
		140
徒	川2	川1
46	110	203
	天2	天1
	3	483
		止
		523

和	王
1	72
	爲
	26
	恵
	26
	遠1
	294
	天
	242

		良2	良1
		14	289
		里	利
		61	331
類	流	留2	留1
1	1	88	202
		連	禮
		34	159
		路	呂
		3	83

屋	也2	也1
2	64	242
	由2	由1
	5	25
	与2	与1
	7	149

満2	満1	末
4	48	181
	美	三
	9	65
	無	武
	2	43
	免	女
	4	86
	毛2	毛1
	126	178

坂康尊

七、『北越雪譜』

作者：鈴木牧之／編撰：京山人百樹／刪定：江島喜兵衛

成立：天保八年（一八三七）刊

底本に関しては、紀田純一郎監修『北越雪譜』（名著刊行会　一九六八年刊行）を用いた。この本に刊記等の詳細は記されていないが、「初版本を洋装とし」という記述があるため、初版のものと考える。このことを前提に、編者代表宮榮二『鈴木牧之全集下巻資料篇』（中央公論社　昭和五十八年七月二十五日発行）の解題を見ると、初編の刊記は「天保七丙申年九月発兌」、二編は「天保十三年壬寅孟春」と記載されていることから、底本の刊記に関してもこれと同様であると考えられる。

調査範囲は次の通りで、読解にあたっては岡田武松編『北越雪譜』（岩波書店　一九八二年六月二二日第一刷発行）を参考とした。

初編上之巻：「地気雪と成る弁」「雪の形」「雪の深浅」「雪中の火」「破目山」「雪頽」

初編中之巻：「雪頽人に災いす」「雁の代見立」「天の網」

初編下之巻：「渋海川さかべつたう」「鮭の字の考」「鮭の食用」

二遍巻一　：「浦佐の堂押」

二遍巻二　：「雪頽に熊を得」「雪中の葬式」「餅花」
二遍巻三　：「鳥追櫓」「雪霜」「田代の七ツ釜」
「年賀の哥」
二遍巻四　：「異獣」「鶴恩に報ゆ」
調査結果は次頁の通り。

『北越雪譜』
調査文字数
10,377
総字母数
74個
内除外字母
17個
差引字母数
57個

	あ
阿	安
2	237
1%	99%
	い
	以
	207
	100%
	う
	宇
	59
	100%
	え
	衣
	23
	100%
	お
	於
	89
	100%

	か
加	可
80	300
21%	79%
	き
起	幾
17	162
9%	91%
	く
	久
	174
	100%
	け
介	計
13	98
12%	88%
	こ
古	己
14	169
8%	92%

	さ
	左
	176
	100%
	し
	之
志	406
12%	88%
	す
	寸
寸 須	170
32 52	67%
13% 20%	
	せ
	世
	74
	100%
	そ
	曽
	82
	100%

	た
太	多
44	317
12%	88%
	ち
	知
	140
	100%
	つ
	川
	110
	87%
	て
	天
	484
	100%
	と
登	止
1	496
0%	100%

	な
那	奈
3	369
1%	99%
	に
丹	尓
2	755
0%	100%
	ぬ
	奴
	17
	100%
	ね
年	祢
7	13
35%	65%
	の
能	乃
1	804
0%	100%

	は
波	八
3	430
1%	86%
	ひ
	比
飛	102
2	98%
2%	
	ふ
	不
	145
	100%
	へ
遍	阝
2	188
1%	99%
	ほ
保	本
5	71
7%	93%

	ま
満	末
24	70
26%	74%
	み
	三
	54
	100%
	む
	武
	26
	100%
	め
	女
	40
	100%
	も
	毛
	317
	100%

	や
也	
61	
100%	
	ゆ
	由
	73
	100%
	よ
	与
	110
	100%

	ら
	良
	100
	100%
	り
干	利
17	571
3%	97%
	る
流	類
1	2
0%	0%
	れ
	禮
	連
	269
	95%
	ろ
	呂
	30
	100%

	わ
	王
	10
	100%
	ゐ
	井
	8
	100%
	ゑ
	惠
	62
	100%
	を
越	遠
33	512
6%	94%
	ん
	无
	77
	100%

『北越雪譜』

総字形数

91個

坂康尊

			左
			ざ
			176
		志	之
		ろ	し
		62	445
寸2	寸1	須	春
す	す	ゑ	ま
17	15	52	170
			世
			せ
			74
			曾
			そ
			82

加	可
か	う
80	300
起	幾
き	き
17	162
	久
	く
	174
計	介
け	け
13	98
古	己
こ	こ
14	169

阿	安
あ	あ
2	237
	以
	い
	207
	宇
	う
	59
	衣
	え
	23
	於
	お
	89

波	盤	者	八
は	ば	し	ハ
3	4	65	439
		飛	比
		ひ	ひ
		2	102
			不
			ふ
			145
		遍	阝
		へ	へ
		2	188
		保	本
		ほ	ほ
		5	71

那	奈2	奈1
な	な	な
3	5	363
耳	尓2	尓1
に	に	に
2	22	733
		奴
		ぬ
		17
年	祢2	祢1
ね	ね	ね
7	3	10
能	乃2	乃1
の	の	の
1	1	803

太	多2	多1
た	た	た
44	1	316
		知
		ち
		140
	川2	川1
	つ	つ
	1	109
	天2	天1
	て	て
	121	363
	奈	止
	な	と
	1	496

		王
		ま
		10
		爲
		ゐ
		8
		恵
		え
		62
越	遠2	遠1
を	を	を
33	1	511
		无
		ん
		77

		良2
		ら
		31
	里	利2
	り	り
	17	1
流	類	留2
る	る	る
1	2	161
		連
		れ
		10
		呂
		ろ
		36

	良1
	ら
	157
	利1
	り
	570
	留1
	る
	327
	禮
	れ
	262
	呂
	ろ

也2	也1
や	や
30	31
由2	由1
ゆ	ゆ
2	71
	与
	よ
	110

満2	満1	末
ま	ま	ま
1	23	70
		三
		み
		54
		武
		む
		26
		女
		め
		40
毛3	毛2	毛1
も	も	も
2	86	229

第三章　江戸時代の字母の変遷

第一節　主要な字母の比較

次の表は、第二章の調査結果から、除外基準に該当した字母を除いた作品ごとの字母、つまりは主要な字母の一覧表である。左側の枠に記載されているものは、使用率65％以上の特に使用率の高い字母で、右側に記載されているものは64％以下の字母である。右側にしか字母が記載されていない平仮名は、その作品において字母の統一が進んでいない平仮名といえる。

用いる用語として、左側の字母を「主たる字母」とする。またそれに対して、右側の字母は「補助的な字母」とする。

表を見ると、今回調査したすべての作品において「す」と「は」を除き、「主たる字母」と「補助的な字母」を合わせても、二種類もしくは一種類しかないことがわかる。またそれらの字母も、江戸時代を通して概ね同様であり、作品ごとにどちらを主たる字母にするか、補助的な字母にするかの違いに留まっている。この違いは作品ごとの特徴として扱っても良いだろう。「す」と「は」に関しても、三種類ある作品が多いものの、それらも同様の字母である。

『英草紙』		『雨月物語』		『東海道中膝栗毛』		『北越雪譜』	
安	阿	安		安		安	
以		以		以		以	
宇		宇		宇		宇	
衣		衣		衣		衣	
於		於		於		於	
可		可	加	可		可	加
幾	起		幾起	幾	起	幾	
久		久		久		久	
計	介		計介	計	介	計	介
己			己古	己	古	己	
左		左		左		左	
之		之		之	志	之	志
	春須		春寸須	春		春	須寸
世		世		世		世	
曾			曾楚	曾		曾	
多		多	太	多		多	太
知		知		知		知	
川	徒	川		川	徒	川	
天		天		天		天	
止		止		止		止	
奈		奈		奈		奈	
尓	耳	尓	仁	尓		尓	
奴		奴		奴		奴	
祢		祢	年	祢	年	祢	年
乃	能	乃	能	乃		乃	
	八者盤		者八		八者	八	者
比		比		比		比	
不		不		不		不	
ß	遍	ß		ß		ß	
本	保	保	本	本		本	
末	満	末	満	末	満	末	満
三	美	三	美	三	美	三	
武		武		武		武	
女	免	女	免	女		女	
毛		毛		毛		毛	
也		也		也		也	
由		由		由		由	
与		与		与		与	
良		良		良		良	
利	里	利	里	利	里	利	
留		留		留		留	
禮	連		禮連	禮	連	連	
呂		路	呂	呂		呂	
王		和	王	王		王	
爲		爲		爲		爲	
恵		恵		恵		恵	
遠			遠越	遠		遠	
无		无		无		无	

	『醒睡笑』		『好色一代男』		『浮世親仁形気』	
あ	安	阿	阿	安	安	
い	以		以		以	
う	宇		宇		宇	
え	衣		衣		衣	
お	於		於		於	
か	可		可	加	可	加
き	幾		幾		幾	起
く	久		久		久	
け	遣	計	希	遣	計	介
こ	己		己	古	己	
さ	左		左		左	
し	之	志	之	志	之	志
す	春	寸須		春須寸		寸春須
せ	世		世	勢	世	
そ	曽		曽	楚	曽	
た	多		多	堂	多	
ち	知		知		知	
つ	川	徒		川徒	川	
て	天		天		天	
と	止		止		止	
な	奈		奈	那	奈	
に	尓	耳	丹			尓仁
ぬ	奴	怒	奴		奴	
ね	年	祢	祢			年祢
の	乃	能	乃		乃	能
は		八者盤	八	者	八	者
ひ	比	飛	比	飛	比	
ふ	不		不		不	
へ	ß	遍	ß	遍	ß	
ほ	保	本		本保	本	
ま	末	万	末	満		満末
み		三美	美	三	三	美
む	武		武	無	武	
め	女		女	免	女	
も	毛			毛裳	毛	
や	也	屋	也		也	
ゆ		遊由	由		由	
よ	与		与		与	
ら	良		良		良	
り	利		利		利	
る	留			類留	留	
れ	連	禮	連	禮	禮	連
ろ	呂			呂路	呂	
わ	王	和	王		王	和
ゐ	爲		爲	井	爲	
ゑ	恵				恵	
を	遠			遠越	遠	越
ん	无		无		无	

但し、例外的に『好色一代男』に関しては、それ以前、またそれ以降の作品と比べて、非常に特徴的な字母の用い方をしている。具体的には「あ」の字母に関して、調査作品の中で唯一、「阿」を主たる字母として用いている。他作品はすべて「安」を主たる字母として用い、「阿」は補助的な字母、もしくは除外基準に該当する頻度でしか用いられていない。また「け」の「希」や「に」の「丹」、さらに「も」の「裳」に関しても同様に他の作品と比べて著しく使用率が高い。『好色一代男』の例外性に関しては別途調査を行ったので、詳細は後述する。

全体的な変遷を見ると、「補助的な字母」の減少、つまりは字母の統一化が時代を経るに連れて進んでいることがわかる。作品ごとに波はあるものの、調査作品の中でもっとも刊行年が古い作品である、『醒睡笑』の補助敵な字母の数が二四個、その次の時期にあたる『好色一代男』に関しては三三個認められるが、最も新しい作品である『北越雪譜』においては九個、その前の時期にあたる『東海道中膝栗毛』では一二個となっていることからもはっきりとしている。これは本論文の冒頭（はじめに）でも述べたように予想していたことではあるが、それでも用いられた字母は江戸時代を通して意外なほど変化が少なかった。このことの要因としては、平安時代等と異なり、読み手の大半が庶民であったことから、字の美しさではなく読みやすさに重点を置き、より親しみやすいよう配慮したということが考えられる。

以上が主目的の一つである「江戸時代を通して主要な字母であり続けた具体的な字母」及び字母の使用傾向に関する調査結果である。

第二節　『好色一代男』の例外性及び調査文字数の妥当性の確認

前節において、『好色一代男』を例外的な作品として扱ったが、調査範囲は作品全体の三割に満たず、例外的であると断定するには情報不足であるため、本作品のみ全体の字母を調査した。その結果は次頁の通りである。

『好色一代男』
調査文字数
39,449
総字母数
108個
内除外字母
34個
差引字母数
74個

坂康尊

			さ
		佐	左
		2	811
		0%	100%
			し
		志	之
		323	2312
		12%	88%
			す
喜	十	須	寸
58	200	262	292
7%	25%	32%	36%
			せ
		勢	世
		76	444
		15%	85%
			そ
		楚	曾
		199	321
		38%	62%

			か
		閑	加	可
		1	742	1183
		0%	39%	61%
				き
		支	起	幾
		2	49	904
		0%	5%	95%
				く
			貝	久
			1	892
			0%	100%
				け
氣	介	計	遣	希
5	6	65	183	275
1%	1%	12%	34%	51%
				こ
			古	己
			146	495
			23%	77%

		あ
安	阿	
210	559	
27%	73%	
		い
		以
		753
		100%
		う
		宇
		402
		100%
		え
		衣
		144
		100%
		お
		於
		435
		100%

			は
波	盤	者	八
2	61	688	1413
0%	3%	32%	65%
			ひ
	日	飛	比
	2	38	526
	0%	7%	93%
			ふ
	布	婦	不
	1	27	568
	0%	5%	95%
			へ
		遍	阝
		153	364
		30%	70%
			ほ
		保	本
		55	81
		40%	60%

			な
		那	奈
		112	1097
		9%	91%
			に
仁	耳	尓	丹
7	52	48	2260
0%	2%	2%	95%
			ぬ
		怒	奴
		4	344
		1%	99%
			ね
			祢
			78
			100%
			の
	農	能	乃
	35	172	2445
	1%	6%	92%

			た
太	堂		多
11	101		794
1%	11%		88%
			ち
			知
			199
			100%
			つ
津	徒		川
19	285		477
2%	37%		62%
			て
亭	帝		天
1	6		2190
0%	0%		100%
			と
	登		止
	7		1838
	0%		100%

			ま
万	満		末
17	39		612
3%	6%		92%
			み
	三		美
	58		220
	21%		79%
			む
	無		武
	19		113
	14%		86%
			め
	免		女
	31		262
	11%		89%
			も
	裳		毛
	589		767
	43%		57%

			ら
		羅	良
		52	986
		5%	95%
			り
			利
李	里	梨	1013
3	81	91	8%
0%	7%	8%	85%
			る
累	流	留	類
12	62	463	667
1%	5%	38%	56%
			れ
		禮	連
		128	790
		14%	86%
			ろ
		路	呂
		118	178
		40%	60%

			わ
和	王		
1	130		
1%	99%		
			ゐ
井	為		
1	4		
20%	80%		
			ゑ
衛	会		
2	6		
25%	75%		
			を
越	遠		
583	772		
43%	57%		
			ん
	无		
	181		
	100%		

			や
也			
452			
100%			
			ゆ
由			
113			
100%			
			よ
与			
526			
100%			

また、作品全体の調査結果と、文字数おおよそ一万字程度の調査結果を比較することで、一万字という調査文字数が、主要な字母を調査する上で妥当な文字数であったかどうかの確認を行う。

まず、前節において本作品を例外的とした根拠である、「阿」「希」「丹」「裳」を全体の調査結果で確認すると、いずれの字母も、一万字程度の調査結果と同様の特徴が認められる。特に「丹」に関しては、「に」の大半を占めていることが確認できた。

また同時期、同作者の作品である『西鶴諸国はなし』の簡易的な調査を行った。

次の表は、『西鶴諸国はなし』において、除外基準等を設けず、発見したすべての字母を記載したものである。

『西鶴諸国はなし』	
あ	安
い	以
う	宇
え	
お	於
か	加可
き	幾
く	久
け	計介
こ	己
さ	佐
し	之志
す	寸須
せ	世
そ	曾
た	多太
ち	知
つ	川
て	天亭
と	止
な	奈
に	仁丹尓
ぬ	奴
ね	祢年
の	乃能
は	八者波
ひ	比飛
ふ	不婦
へ	阝遍
ほ	保本
ま	末満
み	三見
む	武
め	女
も	毛
や	也
ゆ	由
よ	与
ら	良
り	利里
る	留流
れ	禮
ろ	呂
わ	王和
ゐ	爲
ゑ	衛
を	遠越
ん	无

調査範囲は、一巻から五巻それぞれの第一話と第七話で、調査文字数は変体仮名のみで五〇五七文字である。底本は、吉田幸一の蔵本の影印本江本裕『西鶴諸国はなし〈翻刻〉』（おうふう　平成八年三月二十日初版三刷発行）で、読解にあたっては、江本裕『西鶴諸国はなし〈影印〉』（おうふう　平成五年十一月三十日初版一刷発行）を参

考とした。

『好色一代男』の特徴であった、「阿」、「裳」、「に」の大半を占める「丹」や「裳」は認められなかったことから、これらの特徴はやはり『好色一代男』固有の特徴であったと考えられる。

これらの特徴が生じた要因として考えられる事由が、『西鶴』「解説」（天理大學附屬天理圖書館　昭和四十年四月二十三日発行）の一一一頁に記載されていたため、一部引用する。

荒砥屋は、職業的書肆ではなく、この好もしい作品の出版に賛成出費した好事家と推定される。當時の俳書に「大坂住可心」として發句を入集し、また延寶八年五月興行大矢數（別頁俳諧篇八七參看）の追加百韻にも出座してゐる「可心」はこの人であらう。

とある。

『好色一代男』は西鶴の処女作であったことから、売り上げの懸念等の理由からか、当時の専門家ではなく、好事家であった孫兵衛可心の支援の元に作品の版木を作成したようである。このことから、版木の作成に携わったのは孫兵衛可心、もしくは西鶴本人等といったことが考えられる。となれば、版木作成の専門家が作成した他作品と、まったくの素人ではないにしろ専門家ではない人物が版木を作成した作品との間に、一部の字母の使用傾向に大きな差異がでることも、十分に考えられる。これはあくまで仮説ではあるが、同時期の他作品や、同作品の異本をさらに調査すれば、よりはっきりとした結論をだすことができるのではないかと考える。

以上が、『好色一代男』の例外性の確認である。

次に、調査文字数の妥当性に関しては、本節冒頭で述べたように、第二章に記載した『好色一代男』の一万字程度の調査結果と、本節に記載した作品全体の調査結果を比較することで確認を行う。

全体的に見ると、それぞれの使用比率に大きな違いは認められず、ほとんど同様といってよい結果であることが確認できた。

また、全体の調査で初めて発見した字母（「き」の「支」、「さ」の「佐」、「ひ」の「日」、「わ」の「和」、「ゑ」の「衛」等）がいくつかあるが、使用数は極端に少なく、やはり一万字程度の文字数では、正確な字母数を把握することは困難であることも確認できた。

これらのことから、一万字程度という調査文字数は、除外字母のような使用頻度の低い字母を把握することは困難であるが、本論文の主目的である主要な字母を調査する上では、妥当な数であると考えられるため、他の作品の調査結果も、主要な字母を調査するという点に関しては、信用性は十分にあると考える。

第三節　除外字母の比較

除外字母に関しては、第一章で述べたように正確な数を知ることが困難であり、また前節での『好色一代男』の作品全体の調査結果がそれを裏付けるものであったため、情報不足ではあるが、大雑把な変遷をみるため、次の表を作成した。

『英草紙』		『雨月物語』		『東海道中膝栗毛』		『北越雪譜』	
		阿		阿		阿	
加				加			
						起	
	具						
遣	氣	遣希		希			
						古	
			佐				
志		志					
				須寸			
勢		勢					
堂太		堂		太			
	津	徒	津				
	登		登				登
那		那		那		那	
仁丹		耳		耳丹		耳	
怨							
年							
			農				農
	波	盤	波	盤	波	盤	波
飛		飛		飛		飛	
	婦		婦		婦		
		遍		遍		遍	
				保		保	
				無			
				免			
屋				屋			
羅							
						里	
類	流累	類	流	類	流	類	流
						禮	
				路			
和				和			
越						越	

	『醒睡笑』		『好色一代男』		『浮世親仁形気』	
あ						
い						
う						
え						
お						
か	加	閑		閑		
き	起		起			
く		具		具		具
け	介希	気	計介	気	追	
こ	古				古	
さ		佐				佐
し						
す				壽		
せ	勢					
そ						
た	堂太		太		堂	
ち						地
つ	津			津	徒	津
て				帝		帝
と	登			登		
な	那				那	
に	仁丹		尓耳仁		丹耳	
ぬ			怒			
ね						
の		農	能	農		
は		波	盤	波		波
ひ						
ふ		婦		婦布		婦
へ						
ほ						
ま	満		万			
み		見				見
む						
め	免					
も	裳					
や						
ゆ						
よ						
ら		羅	羅			
り	里	李	里	梨李	里	
る	類	流累		流累	類	流
れ						
ろ	路					
わ						
ゐ						
ゑ						
を	越					
ん						

表における左側の枠に記載されている字母は、その作品においては除外基準に該当する字母ではあるが、作品によっては主要な字母として用いられた字母である。それに対して右側の字母は、調査作品全てで除外基準に該当した字母である。

基本的な変遷の流れは、やはり時代を経るにつれて字母数は減少傾向にあり、主要な字母と同様であるように思われる。しかし、前節の『好色一代男』の作品全体の調査結果である、おおよそ四万字の調査においてすら、一文字でしか用いられていない字母が認められたことから、やはり除外字母に関して、今回の調査結果から一定の結論を出すことは、不本意ながら不可能であるといわざるを得ない。

第四章　字母・字形の使用傾向

まず、字形数の変遷について述べると、字母が多ければ当然字形も多いため、字母の変遷と概ね同様の流れである。

字母、字形の使用傾向に関しては、基本的に意図がはっきりしないものが多いが、一部のものに関してはある程度意図を察することができたため、その部分について述べる。

一つ目は、本文の中の歌の部分に関する点である。

最もわかりやすい作品は『雨月物語』である。巻之三の「佛法僧」の中で、四つの歌が書かれている部分がある。その字母、字形を見ると、一つの歌の中に同一の字母、字形を用いないように書かれていることがわかる。具体的には次の通りである。画像は底本の前述の巻の、四丁裏、五丁裏、七丁裏から抜粋したものである。

i

ii

iii

この中で最も注目すべき点は、iiの「の」の字母で、「農」が用いられているという点である。この歌の中で「の」は四回用いられているが、歌以外の部分では、「乃」「乃（字形違い）」「能」の三種類しか用いられていない。調査範囲の中で、「農」が用いられたのはこの一カ所のみであることからも、一つの歌の中で字母を重複させないために、「農」を用いたと考えられる。

また、iとiiiは同じ歌ではあるが、比較すると「乃」と「能」、さらに「毛」の字形が、それぞれ異なっており、まったく同一の字母、字形にならないよう、字形を変化させたり、字母の配置を変えたりしていることがわかる。

歌の部分の字母の使用傾向が、他の部分の字母と異なるという点は、『雨月物語』だけでなく、『東海道中膝栗毛』でも認められた。画像は省略するが、調査範囲の中で一文字しか用いられていなかった「類」と「流」、さらに「阿」が、それぞれ歌の部分でのみ用いられている。その他の作品でも歌の部分は、一文字しか用いていない字母でなくとも、除外基準に該当するような、他の部分での使用頻度の低い字母が用いられる場合が多い。

これらの特徴は、通常の文章と異なり、歌は字の形の美しさも重視している、という点から生じたものと考えられる。歌や書道作品を制作する際に、同一の字を用いる場合は崩し方や変体仮名を変えて用いるという決まり事のようなものがあるが、このことに通じる特徴である。

さらに、これは歌に限らないことではあるが、歌もしくは話（作品における一話、二話等）の末尾の字形はより漢字に近い崩し方をしていることが多いようである。前頁の歌でいうとⅰとⅲの「那」がこれに該当する。他作品においても、話の最後の部分では同様の特徴が散見できた。

二つ目は、特定の言葉に対して、作品を通して概ね同様の字母を用いる、ということである。あくまで一つの作品ごとに、であり、江戸時代を通してではない。例を挙げると、『好色一代男』での「こころ（心）」という単語が挙げられる。作品全体の中で一〇八カ所「こころ」という単語が用いられていたが、「己丶呂（路）」と表されたものは一カ所に留まり、残りの一〇七カ所は「古丶呂（路）」となっている。ここまで極端な例は希だが、単語ごとにある程度傾向が決まっているという特徴は、他の作品においても認められた。同じ「心」という単語でいうと、『雨月物語』においては、「こころ」という単語が九カ所認められたが、そのうちの七カ所が「古丶路」となっている。

三つ目は、「す」の「須」に関する傾向である。この字母は江戸時代を通して、比較的多く用いられ続けた字母であるが、調査をしている中で、否定の意味をもつ「す（ず）」として用いられる傾向が強いと感じた。おおよそ五割から六割程度の「ず」が、「須」で表されていたように思う。具体的な数は調査できていないため、曖昧な表

現になってしまったが、字母の種類の多い「す」の中で、明らかに否定の「ず」における使用頻度が高かったため、一例として挙げておく。また、前章の『好色一代男』の作品全体の調査において、「す」の「壽」が、「須」と同様に、否定を表す「ず」として用いられる頻度が多いことが確認できた。この特徴も他のいずれの作品でもみられなかった特徴である。

四つ目は「いろはうた」に関する点である。このことは本論文の冒頭（はじめに）で述べた浜田啓介氏の論文でも、触れられていた部分である。一部を引用すると

いろはと書くときは必ず「いろは」と書き、その「は」に他の変体仮名を宛てることはなかった。

とある。今回の調査では、このことを改めて確認する結果となった。『醒睡笑』と『北越雪譜』、また『好色一代男』において、それぞれ五カ所と二カ所と一カ所「いろは」という単語が認められたが、すべて「以呂波（いろは）」となっていた。「波」という字母は、江戸時代を通して除外基準に該当し続けた字母であり、基本的にあまり用いられていない。また、奇しくも調査作品の中で最も古い作品と最も新しい作品での発見となった。この「いろは」に関する傾向は、江戸時代を通して、または江戸時代以前から、変化していないようである。

最後は、「も」と「や」の字形に関することである。　次の表に記載されているそれぞれの字形をみると、字形の共通点として、「も」と「や」いずれも一筆で書かれているかのような崩し方をしている、という共通点が認められる。

そして、これらの字形の直前の字に用いられている字母、もしくは直後に用いられている字母に、共通点が認め

	字形	「も」の上に「お」がくる部分			「も」の下に「の」がくる部分	
『醒睡笑』		33カ所中33カ所	100%		12カ所中12カ所	100%
『好色一代男』		45カ所中42カ所	93%		2カ所中0カ所	0%
『浮世親仁形気』		8カ所中8カ所	100%		23カ所中20カ所	87%
『英草紙』		2カ所中2カ所	100%		65カ所中26カ所	40%
『雨月物語』		12カ所中9カ所	75%		19カ所中19カ所	100%
『東海道中膝栗毛』		28カ所中24カ所	86%		45カ所中40カ所	89%
『北越雪譜』		21カ所中21カ所	100%		36カ所中34カ所	94%
計		149カ所中139カ所	93%		202カ所中151カ所	73%

	字形	「や」の下に「う」がくる部分	
『浮世親仁形気』		41カ所中40カ所	98%
『英草紙』		11カ所中11カ所	100%
『雨月物語』		5カ所中4カ所	80%
『東海道中膝栗毛』		25カ所中16カ所	64%
『北越雪譜』		15カ所中14カ所	93%
計		97カ所中85カ所	87%

られた。

「も」に関しては、表に記載した「も」の上にある「お」（例：「思ふ」等）と下にある「の」（例：「者」「物」等）は、特に顕著に表れていた部分であるが、この二つ以外の部分では、「も」の下に「之」「多」「川」「天」「止」「奈」「良」等が用いられている場合に、おおよそ五割から七割程度、似通った字形の「も」が用いられていた。これらの特徴は、江戸時代を通して概ね同様であったが、作品ごとの傾向も見受けられた。例えば、『英草紙』の「も」の下に「の」がある部分では、他作品と比べて の使用率が低いが、代わりに別の字形の「も」 が35カ所用いられていた。

次に「や」に関して述べる。まず『醒睡笑』と『好色一代男』では、この字形の「や」は認められなかった。これが時期によるものか、作品の特徴によるものかは不明だが、以降の作品では「も」と同様に、使用傾向に関する共通点が認められた。特に顕著に表れていた部分は、表に記載してある「や」の下に「宇」が用いられている部分（例：「〜のやう」等）である。この部分以外では、「久」「之」「利」等が用いられている場合に、おおよそ五割から七割程度、似通った字形の「や」が用いられていた。

「も」の調査結果と、「や」の調査結果を見ると、表に記載しなかったおおよそ五割から七割程度の部分は、偶然とみることができなくもないが、表に記載した三つの部分に関しては、偶然とは言えない程に、使用する字形に偏りがあることがわかる。「や」に関しては、前期頃の二作品には、この字形そのものが認められなかったが、「も」の、特に上に「お」がくる部分では、江戸時代を通して同様の傾向が強く認められた。

結論として、これらの「も」と「や」に関しては、版木の作成場所、時期、作者に関わらず同様の傾向が存在していることから、版木を作成する、もしくは作品を書くにあたって、ある程度の決まり事のようなものが存在したと考えられる。

以上が字母、字形の使用傾向に関する調査結果である。

おわりに

今回の調査で、序論で述べた本論文の主目的である「主要な字母の変遷」、「字形の使用傾向の規則性」、また調査の過程で新たに生まれた『『好色一代男』の例外性」に関して、一定の結論を出すことが出来た。

しかし、今回の調査ではわからなかったこと、また今回の調査で新たに生まれた疑問がいくつか残っている。

一つ目は、今回調査対象外とした、振り仮名の変遷に関することである。二つ目に除外字母のような、極端に使用頻度の低い字母の調査である。また、字形の使用傾向に関しても、今回注目した点は歌、いろはうた、特定の単語、「も」と「や」に関してであるが、他にもある程度規則性をもつ単語等が存在していると考えられる。

これらの疑問に関しては、調査作品数が少なかったことや、調査対象をある程度絞ったこともあり、本論文で触れることはできなかったが、また機会があれば、より対象を絞った調査を行いたい。

〔注〕

（1）浜田啓介「板行の仮名字体―その集歛的傾向について―」昭和五四年・五・一三　国語学会講演会発表（発表時の題名は「板行の文字」）